

史遊会通信

No. 193
平成22年
12月22日
発行

事務局
03-3712-0651
下山田方

特集
今年感動した三冊の本

鯨遊海

①「古代神祇信仰の成立と変容」

篠田絨一郎著 彩流社

私は以前本誌に日本語の源流はスタンダランド亜大陸に由来するとの仮説を書いた。国語学者故大野晋の印度南端部ニタミル語源流説の弱点？を私なりに補正した説である。大野説は単語、文法、語調等タミル語と万葉語との類似が多いにも拘わらず余りにも遠過ぎる等から学会の主流とならず今に至っている。私の仮説は最終氷河期（BC一万八千〜BC一万六千年）にインドネシア近海に実在したスタンダランド亜大陸が濫觴で、その西への伝播の終着地が印度タミル地方に、北東へのそれが日本列島にという

想像から発したものの、縄文人の祖が瀟した。さて本書は記紀神話等のルーツの多くがこのスタンダランドに発し、他の有力とされる中国江南説を凌駕していることを実証された。天孫降臨神話こそ北方ルーツではあるが、他の多くの説話が南太平洋諸島に伝わる説話と一致することを詳述する。先人の研究とも比較し、遺伝子科学をも動員して客観的である。更に井上政行氏の「ポリネシア語と縄文語の類似」なる研究にも言及されている。私はこ踊りして本書を何回も読み返した。縄文人ニ万葉語のルーツはやはりスタンダランド亜大陸だったとの意を強くした。本書を勧めてくれた新井宏会員に感謝。

想像から発したものの、縄文人の祖が瀟した。さて本書は記紀神話等のルーツの多くがこのスタンダランドに発し、他の有力とされる中国江南説を凌駕していることを実証された。天孫降臨神話こそ北方ルーツではあるが、他の多くの説話が南太平洋諸島に伝わる説話と一致することを詳述する。先人の研究とも比較し、遺伝子科学をも動員して客観的である。更に井上政行氏の「ポリネシア語と縄文語の類似」なる研究にも言及されている。私はこ踊りして本書を何回も読み返した。縄文人ニ万葉語のルーツはやはりスタンダランド亜大陸だったとの意を強くした。本書を勧めてくれた新井宏会員に感謝。

例会のお知らせ

◎ 1月総会

日時 平成23年1月26日（水）

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 * 22年度事業報告

* 同 会計報告

* 23年度事業計画

* その他

◎ 総会終了後

講演 山本鎮雄氏

テーマ 未定

自由執筆は佐藤健一・千坂精一

森下征二の諸氏

締切 1月5日

◎ 2月例会

日時 平成23年2月23日（水）

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 中込勝則氏

②「儒教とは何か」

加地伸行著 中公新書

私たち日本人は、習慣や生き方、死生観等どつぷりと儒教の影響を受けているにも拘わらず、倫理道德等を除いては殆んど意識していない。否、恐らく多くの人は無知であろう。一例を挙げる。仏葬の際先ず拝むのは遺体と遺影である。その為か二つは式場中央に直線に安置されている。実はこれは儒式のマナーであつて、本来の印度仏教ではあり得ない事だそう。本来仏教で先ず拝むのは、本尊を象徴化した掛け軸であるという。そこには南無阿弥陀仏（浄土宗、真宗系）、南無釈迦牟尼仏（禅宗系）、南無妙法蓮華經（日蓮宗系）等と書かれている。浄土に導くか否かを決めるのは本尊なのだから。遺体は魂魄の抜けた単なる物体。火葬にして灰は大河に流してしまふ。

このように日頃私たちが経験する仏葬とは、本来の印度仏教とは別の神仏儒混在した「日本仏教」なのだそうである。因みにお清めの塩は仏教とも儒教とも無関係の、神統の習わしという。目から鱗なのは私ばかりではなからう。

儒教は仏教、基督教、回教より古く、原

儒は前十八世紀殷初に起こり、前六世紀に孔子によって体系化された。この現世肯定的な楽観の教義は、現実主義者の漢民族の支持を得、道教と融合しつつ発展、北東アジアに伝翻していった。仁義礼智信や孝をキーワードに民衆には生き方の指針となり、権力には統治の原理となった。日本では神統や仏教、武士道とも融合し我が民族性を形成してきた。礼節、勤勉、誠実、孝行、親和、協調等日本人の特性は普遍的、超宗教的な絶対的な価値であろう。仏教が生老病死と現世は苦で、せめて来世の浄土に憧れるとする暗く厳しい教義であるのに対し、儒教は現世を樂とし、祖先↓子孫へと孝に

①「幻想の古代史」

ケネス・フィーター著 楽工社

古代史に係る新発見の報道には何時も心を躍らせられる。しかし中には全くのどつち上げで捏造されたものが入り込み、人々を熱狂させてきた。本書は主要な捏造事件を紹介すると共に、事件の経緯やその背景を解説している。

村上 邦治

よって永遠の生命が宿り続けるとする。近時のDNAの連鎖を予見していたかと思わせるではないか。論語は「復た樂しからずや」と冒頭から樂しい。孟子も性善説を唱え楽観である。苛酷な印度や中近東に較べ温和な北東アジアの風土に合った教えであつた。更に十二世紀朱子によって宇宙論、存在論に迄高められたという。

人は無宗教でも生きていけるが、仁義礼智信や孝無しには生きていけない。排他的な一神教に較べ何とでも融和し得る寛容性、全ての民族に通用する普遍性のある儒は、二十一世紀に人類を救う不滅の思想にも思えてくる。私はこれを超宗教と名付けたい。

英国で二十世紀の初めに有名なピルトダウン人の捏造事件が発生している。当時ドイツでネアンデルタール人が、フランスでクロマニヨン人の化石が発掘されていたが、英国では人類進化を示す重要な発見はなかった。誇り高い英国人は自分の国から人類祖先の化石が出土しない事に不満を抱いていた。こうした状況下でこの捏造事件が起きていた。幼稚な小細工で作製されていた

にもかかわらず、人々は長い間騙され続けていたのだ。

しかし一〇〇年前のこの事件を我々日本人は笑うわけにはいかない。つい十年前に旧石器遺跡の捏造が発覚している。それも科学的な証明ではなく、捏造行為中の写真撮影によってである。多くの日本人は北京原人やジャワ原人と同じくらい古い祖先が日本に住んでいた事に何も疑問を持たず、マスコミや新聞も大きく報道し日本国中が興奮してきたのである。ピルトダウン事件の時代と違い科学的年代測定法が開発されていたにもかかわらず、専門家の異論はほんの一部に止まっていた。

著者は「人々が欲しがるもの」に考古学捏造事件が成功すると指摘している。多くの人が真実であつて欲しいと非常に強く思ったからこそ、大きな成功を収めたのである。最近の桜井巻向遺跡に係る発掘成果が、強引に邪馬台国や卑弥呼と結びつける一部学者や新聞の報道対し、冷静な受け止めが大切なことをこの本から学んだことは幸いであつた。

②「倭人伝を読みなおす」

森 浩一著 ちくま書房

日本古代史研究を代表する学者が、最大の資料である「魏志倭人伝」を初心者向きにやさしく解説したものである。新聞に連載されたものもとになつていたので、大変読みやすく理解もし易い。

しかし六十年にわたり研究してきた専門家の本だけに、古代史に興味を持つ者には改めて得るものは多い。著者は、倭人伝のみを読んで研究する人が多いが、倭人伝はあくまで東夷伝の一部であり、高句麗伝など韓伝や後漢書を研究して倭人伝を比較検討すべきと警告している。また倭人伝に描かれていゝるその土地に自分で実際に立つて感触を得るべきであることをアドバイスしている。

また倭人伝の原文そのものにも直接に触れてみることも大切なこととして、原文を掲載している。確かに初めて漢語に触れてみると、訳文では味わえない風景が見えてくるから不思議である。この本を通じて初めて原文を読んだのは私としては収穫であつた。

著者は邪馬台国九州説であるが、倭人伝の描く邪馬台国が論理の飛躍や矛盾なく九州に位置していた事を論証している。この

本から九州説に納得する人も多いと思われる。

③「二宮金次郎から学んだ情熱の経営」

三戸岡道夫編 栄光出版

金次郎の思想と実践活動を熟知する著者が、低迷する日本経済下にも係らず成長を続ける優良企業や団体を訪問しその秘訣を探る中で、金次郎の思想が経営に取り込まれ企業活動に彼の実践活動が生かされていることを発見したルポである。最後の章ではバングラデシユグラミン銀行の社会公益事業を中心とする独特のビジネスモデルを紹介している。そこには金次郎の実践活動と多くの共通点が見られ、海外でも金次郎の思想や実践活動は有効であることを論証している。

金次郎と現代の企業を結びつける作業は、ビジネス世界において多くの経営者と接し、企業分析に実績をもつ著者の強みである。金次郎の目を通した企業の分析や紹介を行う事は、彼の思想や実践活動の普及には欠く事のできないことであり、今後の著者の続編を期待したい。

柴田 弘武

①「縄文語からヤマト語へ」

鈴木健著

本書は鈴木氏の「縄文語の発掘」、
陸国風土記と古代地名』（共に新読書社刊）
と共に縄文語三部作の一冊であるが、本書
はやむを得ない事情で自費出版されたもの
である。

氏は「縄文語をそのまま」といっても転
音、消滅、発生、流入等による多少の変動
はあり、特にいわゆる樺太アイヌ語にはツ
ングース系言語がかなり浸透していた形跡
がある―受け難いだがアイヌ語で、縄文
語に渡来系の言語が混入ないし融合したの
がヤマト語である。」として、現在ではそ
の語源がわからなくなっている日本語（ヤ
マト語）が、アイヌ語を介することによっ
て明らかとなり、アイヌ語もヤマト語もそ
の祖形は縄文語にあったことを、七三五語
の例を出して証明している。それらの例は
なるほどとうなずかざるを得なかった。

私しがねてから吉野の喜佐谷を万葉集で
は「象谷」と書いているのが不思議であっ
た。例えば大伴旅人は「昔見し象（きさ）

の小川を今見ればいよよさやけくなりにつ
けるかも」（三一九）とうたっているし、武

市連黒人も「象の中山」（七〇）と書いて
いる。今も吉野町喜左谷には象山がある。

「象」という漢字をなぜ「キサ」と読むの
かが疑問だった。ところが本書を見ると、

アイヌ語の *kisara* は「耳」。地形では耳
のように突出している部分」とあり、「日
本書紀」の天稚彦の葬儀に「川雁（かはか
り）を以て持傾頭者（きさりもち）とし」

の例を挙げ、岩波大系本の頭注に「キサリ
の語義未詳。持傾頭者の意は、纂書に「死
人の頭を挙げぐる者を謂うふ」とある。」

を引用した上で、「死者の頭を持ち上げれ
ば自然に傾頭となる。そのとき傾頭持つ者
の両手の位置は耳の後ろにある。キサリ持
ち〓耳持ち、キサリ〓耳である。象の古名
をキサというのも *kisara* でその特
徴的な大耳からか」と書き、地名としては
象潟、木更津などがキサ（耳）地形による
か、としている。

万葉人が象という動物を知っていたかど
うかはわからないが、中国では殷の時代に
は象がいたというので、縄文人も大耳の象
を知っていて「キサ」と呼んでいたのでは

ないか。ともあれ象谷の語源が私には氷塊
したのである。

以上は一例だが、本書によって記紀や万
葉の古典で語義不明の言葉が相当氷塊した
のは確かであった。

②「邪馬台国と狗奴国と鉄」

菊池秀夫著 彩流社

本書は古代製鉄の新知見（浅井壮一郎氏
やわが新井宏氏など）を大幅に取り入れて、
邪馬台国九州説を構築している。その場合
他書ではあまり触れられていない狗奴国を
クローズアップしている。「魏志倭人伝」
で女王国の南にあるのが狗奴国であるが、
その官に狗古智卑狗がいたとあるが、それ
は呉音で読むと「くくちひく」となり、そ
れが現在の菊池として地名に残っていると
主張している。私も若干絡んだ本なので印
象深い。

③「寺社勢力の中世」

伊藤正敏著 ちくま新書

いま「無縁社会」という言葉が注目され
ているが、中世社会における寺社勢力の範
囲が無縁所であった。「国家は無縁世界を
必然的に生み出す存在なのだ」という言葉
に凄味がある。

(友の会) 漆原 直子

①「遠野物語の原風景」

内藤正敏著・荒蝦夷出版

今年の五月に、遠野で「全国地名研究者大会『遠野物語』と地名」が開催された。ちょうど、遠野物語百周年の年でもあり、その記念事業の一環でもあった。その中で、著者の「遠野の金属伝承」の講演があり、印刷が仕上がったばかりのこの本が売られていた。著者は写真家でもあり、民俗学者でもあるのだが、著者の写真は「闇」が写し出されており、くっきりした明暗が暗部を際立たせ、「闇」を感じさせる。常に目に見えない何かしらの気配を感じさせる。本書では、遠野を修験道や金属民族学の視点から捉えていて、興味深い内容である。

②「渡来の祭り 渡来の芸能 朝鮮半島に源流を追う」

前田憲二著 岩波書店

今から約二十年前に、映画監督である著者は、『神々の履歴書』(一九八八年)、『土俗の乱声』(一九九一年)、『鉄と伽耶の大巫たち』(一九九二)等の映画を製作。私は上映会でそれらを見たのだが、そ

の頃、金達寿氏の『日本の中の朝鮮文化』シリーズを読み漁っていた時で、映画を見て、ますますその観を強くしていた。この本は、それら映画の製作を通して、複雑に絡み合った、日韓の歴史と文化をとらえ直すものである。

③「アスペルガーの偉人たち」

イアン・ジェイムズ著

スベクトラム出版社

ここ数年、「発達障害」という概念が普及しているが、アスペルガー症候群は、その代表的な障害名である。言語・知的な遅れを伴わない自閉症、高機能自閉症又は高機能広汎性発達障害と言われるものである。脳の機能障害が原因であるが、なぜ障害が起きるかの理由はまだよくわかっていない。遺伝要因はあるとされる。

このアスペルガー症候群は、その特異性からしばしば天才的といわれるような才能が見られることがあり、いわゆる偉人としてきた人たちの中にも、この特徴がみられることがある。本書はそうした経緯を遡ってとらえる視点(病跡学Ⅱ医学や心理学の知識をつかって、天才の個性と創造性を研究しようというもの)から偉人たちの言

動を解析する。例えば、ミケランジェロ、スペイン王フェリペ二世、アイザック・ニュートン、ゴッホ、シモーヌ・ヴェーユ、アインシュタイン等、歴史上の著名な人物が挙げられている。日本において専門家は、南方熊楠をあげており、私自身は密かに宮沢賢治もそうではないかと思っている。

アスペルガー症候群ではないが、ヒトラーは被虐待児である。子供の頃から父親の暴力にさらされ(当時のドイツは、非常に厳格で暴力的な教育方法が広がっており、ヒトラーの家庭以外でも、子供たちは家庭でも学校でも激しい暴力に晒されていた、という)、大人になってからの彼の政策は、自分が受けた暴力を全人類に対して「やり返す」性質のものであった。(スイスの心理学者アリス・ミラー著の『魂の殺人』は、その経緯を心理的に分析している。)ナチズムの台頭は、ヒトラーのみならず、それを受け入れてきた同時代の人々も含めて、こうした幼少期の体験が根底にある。児童虐待は、第4の発達障害とも言われ、その人の人格や性格の形成に影響を与える。歴史上の諸事象もそうしたことの影響が多分にあると言える。

(友の会) 諸橋 奏

① 『ミルクロード』

松尾幹之著 日本経済評論社

② 『チーズのきた道』

鴫田文三郎著 講談社学術文庫

③ 『初恋五十年』

三島海雲著 ダイヤモンド社

『ミルクロード』は農業経済専門の農学博士松尾名古屋大学教授による教科書的著作で、日本の古代の乳製品から大正、昭和の酪農・乳業の発展、更に将来の指針まで教示している。この産業に係わる者には必見の一冊といえよう。

『チーズのきた道』この著書が先般、学術文庫入りを果たしたのを機に、他の二冊も併読することとなった元本で、「乳の生化学」を専門とする農学博士鴫田信州大学名誉教授の力作。食文化・乳文化・特にチーズ文化を比較言語学等から、西アジア発祥のチーズが伝播していった道を探求している。

『初恋五十年』はカルピスの発明者三島翁が米寿を迎えて著した自叙伝で、若き日に訪れた蒙古での想い「蒙古民族の活力のもととは酸っぱい乳のクリーム」に魅せられて

一生をこれの商品化にかけた起業家魂に圧倒される。

ところで、この三著書に共通して登場する重要な乳製品がある。それは「醍醐」である。然らばその醍醐とは……。

日本人が牛乳・乳製品を初めて知るののは仏教を通してで、公伝は五三八年とされる。『大般涅槃教』に「譬如從牛出乳 從乳出酪 從酪出生酥 從生酥出熟酥 從熟酥出醍醐 醍醐最高」と。今様では「酪」は脱脂乳醍醐酪乳でヨーグルト状のもの、「酥」はクリーム状酥油、「酥は蘇と同じ」とあるが、「蘇」は乳を加熱して十分の一に濃縮した練乳で、更に減水すれば、チーズ様(奈良味土産「飛鳥の蘇」ということになろうか。「醍醐」については牛乳を精製した五段階の五味最高とし、仏の最上の教法に譬えられているが、その語源は古代インドの雅語梵語の Rāyā の音訳で、醍醐乳、酸乳、凝乳のことという。中国語で醍醐は牛乳から精製した甘味なるものというが、五味の製法は不明と伝える。唯、文字が何れも酒を醸造する器の西偏であるのは醍醐・熟成作用に係りがあることを示しているといえよう。

又、宋代の『政和證類本草』に「醍醐色黄白作餅甚甘肥 亦時至江南」とあり、長江南岸地方には暹々インドから船荷で来ていたものと思われる。

インドでは、前千五百年の聖典ヴェーダに既にバターの使用が記されているという。昨今はバター・チーズからの乳製品は多種多様である。古代バターは今のチーズに近かったといわれ、ダイゴはチーズだ、バターとチーズの合の子だとか諸説粉々であるが、ダイゴは、唐天竺、仏の最高真理、最高の食物、奇しき不老長寿の仙薬……と人間究極の憧憬としての幻の産物だったのであろうか。

この奇しき「酥・醍醐」の商品化に生涯をかけた三島翁の挑戦の軌跡は、大正五年(一九一六)、酸乳クリーム「醍醐味」(梵語サルピルマンダ) 大正八年、乳酸飲料「カルピス」(熟酥の梵語サルピスとカルシウムの合成語) 昭和三十一年(一九五六)、酸酵乳「ピルマン」 昭和三十五年、乳酸菌飲料「パンピト」 昭和三十九年、酸酵乳「ダイゴ」 などの発売を挙げることが出来る。

新井 宏

①「もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーの『マネージメント』を読んだら」

岩崎夏海著 ダイヤモンド社

②「これからの『正義』の話をしよう・いまを生き延びるための哲学」

マイケル・サンデル著 早川書房

③「旧石器捏造事件の研究」

角張淳一著 鳥影社

今年、めずらしく話題作をかなり読んだ。ちょっと威張りたいのは、いずれも話題作になる前にである。

まず①の「ドラッガー」は、ひょんなことから都立進学校の程久保高校野球部のマネージャーを引き受けることになった女子が、甲子園入りを決意し、ついに優勝してしまうまでの青春物語である。

もちろん、都立進学校の野球部などは地区予選の初戦を突破することさえ難しいのが現実であり、マネージャーなどと名がついていても、要は雑用係である。したがってテーマは夢物語なのであるが、寄るべきものを持たない女子マネージャーは、その過程で常にドラッガーの『マネージメント』

の「格言」を持ち出して、困難にぶつかる、それを忠実に実行するのである。

物を書いていて、アイディアに窮した時に、全く異質の「物語」を下敷きにして書き始めると、誰でも一定水準のものが書ける。私の書き物にもそのような類例が多いので、ドラッガーを持ち出した岩崎夏海に声援を送る。作者はアイドルグループプロジェクション・ジュースにもかかわる才人のようである。

②はハーバード大学史上、最多の履修者数を誇るマイケル・サンデル教授の講義録である。

私は日頃、「正義」の反対は「悪」ではなく「もうひとつの正義」だとか、「正義」と「正義」がぶつかりと宗教戦争や嫁姑戦争のような悲劇が起こるなどと書き散らしている、興味を持って読んだ。

講義の進め方も洗練されていて良書。欧米の哲学史が学べる。

そこには、キリスト教やイスラム教のような一神教の「絶対的な正義観」になじんだ西欧人が、現代社会の多様な状況に直面し苦悩して、「多様な正義観」を認めざるを得なくなっていく様子を見てとれる。

それなら、私のように「正義」などないと割りきってから、始めた方が簡単なように思うのだが。そして東洋の哲学が「正義」を描いたらどのようなかを考えた。

③は旧石器捏造事件十年目にして初めて「犯罪」の核心を告発した書。

角張淳一は最初に旧石器捏造事件を疑い、インターネットで告発した人物。発掘調査などを業とする会社「アルカ」の経営者であるから、考古学界を敵にしての告発は、極めて勇氣のいることであった。

そして、十年目にして至った結論は、この捏造事件が単なる藤村新一の「石器捏造」などではなく、岡村道雄らの「考古学研究の捏造」という「あらかじめ求められる事実」を捏造した事件であったことを明らかにしたのである。

ちょうど十年目を迎えた旧石器捏造事件について、新聞各誌が特集を組んでいるが、総じて、批判的な検証とはほど遠い内容である。私のところ、取材にきた読売新聞が、私の発言を載せ、最も批判的な総括をしていたが、それでも角張淳一の本については、一言も触れていない。これがマスコミの限界なのであろうか。

(友の会) 正木 清幸

① 風雪の歌人(孫戸妍の半世紀)

北出明編著 講談社出版

書庫の整理中覚えの無い本が出てきた。孫戸妍は大戦中の朝鮮最初の女性歌人でありその稀有な人生に感動、一気に読了した。

父君は早稲田の留学生で、彼女は一九二三年東京に生まれ直ぐ朝鮮に帰国し、四〇年来日、帝国女子専門学校に留学、四三年同校卒業。在学中、日本語の詩の美しさに目覚め佐々木信綱に師事短歌を詠み始めた。四四年帰国し、戦争中あらゆる非難に屈せず短歌に精進、二一歳で処女作『戸妍歌集』を出版した。四七年結婚、一男四女をもつけ、朝鮮動乱による避難生活も体験した。子供の養育と教育に専念し一段落した七八年には万葉集など古典研究の為来日、成城大学大学院で中西進教授の指導を受け五冊の句集を刊行。恩師の推薦により、九八年宮中歌会始の陪聴者として韓国人で最初の宮中参内の榮に浴した。

晴の目に合わせて縫いしチマチョゴリ

着て慎ましく歩きみるかな

戸妍はこの歌の完成の為に私の人生の殆

どを費やしてしまったとその歎びを詠んだ。

二〇〇〇年一〇月には韓国政府から『日本の伝統詩である和歌を通し韓国民の感情を日本に伝えた功績』により『花冠文化勲章』を授与された。北出明氏は韓国唯一の歌人孫戸妍さんに感動しこの一文を纏めた。孫戸妍は〇三年腎不全で病没、享年八〇歳。

② 情熱の経営(二宮金次郎から学んだ)

三戸岡道夫編 栄光出版社
編者の『金次郎の一生』は二六刷突破のベストセラーとなったのはご承知の通りである。お陰で我々戦前派は負薪読書の金次郎像のイメージから『仁徳の精神』により生涯に六百余ヶ村という農村復興を実現し且、死後私有財産は全く残って居なかったという無私に驚愕感動したのである。然るに敗戦後六五年、尊徳仕法が、何故現在の全国民、全経営者に爆発的に浸透しないのであろうか、編者はその実情を憂い『情熱の経営』を世に問うたのであろう。誠に適切な著書であると信ずるが此の仮推移すれば元の木阿弥、アメリカの一属国に墮しミサイル一発で国中が震え上がり、破片を持ってワシントンにお願ひに行くようでは最早独立国ではない。大統領が変わ

れば安済消も有り得るのだ。五〇年後百年後の子孫を泣かせるわけには行くまい。

私はここで新国定教科書の発行を提言したい。憲法に定める義務教育は、総て国費負担である。国民の徳育教科書は、堂々と文部科学省が責任を持って作成、国会の議を経て教育すべきである。勿論尊徳翁始め日本を代表する偉人の業績等はしっかり掲載する。日教組がどうしても反対なら解散を命ずる。教職は聖職。但しその身分は尊重され、待遇の適正を期さねばならない。

③ 峠(上・中・下巻)

司馬遼太郎著 新潮社

私が『峠』を「今年感動した三冊の本」に取り上げたのは、何を今更と諸賢の失笑を買うであろうが、司馬ファンとして誠に申訳ない。氏は私より一歳若く陸軍の幹部候補生出身で親近感も大きい。私は氏の戦記ものは殆ど読んだが四三年発行の本書は、畏友諸橋氏の推奨で一氣に読み、繼之助のサムライ性に感銘した。多言は無用、本年八月早速愚妻同伴長岡市を訪問した。同市は五〇年前私が勤務した土地で、山本元帥始め多くの偉人を生んだ長岡魂が今尚長岡市民の血潮に脈々と流れていると感じた。

平山 善之

歳をとった為か、昨今、昔読んだ本や古典を手にかかると多く近刊書に手が出難い。汗牛充棟をなす新刊書は、著者から恵贈されたものを除けば、本屋で背中を眺めるのみである。

読書量が減ったわけではない。現在も、鈴木大拙全集三十巻を頭から読み続けているがこれは難しくて論評どころではない。

今年には柳田國男が「遠野物語」を刊行後百年という。明治四十三年（一九一〇）、三十五歳、農商務省の役人であった柳田が岩手県上閉伊郡遠野町（当時）出身の佐々木喜善から聞いた話を世に紹介したものだ。私は、書棚の片隅から文庫本を取り出し、その塵を払って、再読した。

この物語は「花巻の停車場にて汽車を下り、北上川を渡り、其の川の支流、猿ヶ石川の溪を伝いて、東の方へ入ること十三里」の遠野郷に伝わる民話を集め一一九段に分けて文語体で書いたものである。千年以上昔に書かれた「今昔物語」や、「大和物語」と同じ体裁である。それらを意識して書いたことは序文からも知られる。

序文は、三島由紀夫が、「名文であるのみではなく、氏の若き日の抒情と哀傷がにじんである。魂の故郷へ人の心を拉し去る詩的な力にあふれてゐる」と絶賛した。

（昭和四十五年六月十二日付読売新聞）
「遠野の城下は即ち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りてひとり郊外の村々を巡りたり。（中略）猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸国其比を知らず。高処より展望すれば早稲正に熟し晚稲は花盛にて水は悉く落ちて川に在り。」云々。

柳田が明治四十二年八月、遠野へ行った時、途中は人煙稀であったが四方を山で囲まれた遠野は繁華であったらしい。江戸期は、南部氏の分家が一万石で領した城下町で、街の南に城跡も残る。ただ近隣の村々や山間部に至れば、家々には様々な奇談、怪談めいた話が現実のものとして語られていた。

オシラサマ、ザシキワラシ、神かくし、山女などいずれも「現在の事実」として語られ居ることに、著者の心は烈しく震えたことであろう。

「今昔物語」は書かれた時すでに「今はむ

かし・・・」として語られた。「大和物語」は宮中や貴族社会の出来事が中心であった。こちらは農民、樵夫、獵師といった民衆の、生きている話である。体裁を同じくするといつても片や平安文化、貴族文化の宙に浮いた話であり、こちらは明治文化、民衆文化の顕現である。地方に生きる大衆の息吹と、樹木、山や川のたたずまいを読者に感じさせる。その意味で、柳田國男が我國の民俗学の祖とみなされている理由が解ったような気がする。

私は今年六月、文庫本を懐に遠野へ出掛けてみた。新幹線の新花巻駅から釜石線で四十分、確かに山深きところだが、十三里はあつという間である。

遠野の町は「物語以来百周年」で忙しいらしかったが、規模は百年前とさほど変わったようには見えない。城跡の高処から見下ろせば早稲の緑豊かに、四圍の山々は昔のままのように思える。馬ならぬレンタサイクルを駅で借りて、一日、河童が住むという淵や路傍の石塔をみて廻った。北方に遠く早池峯山を眺めて、この百年に思いを馳せたのである。

(友の会) 小林 義人

①「許されざる者」上・下

辻原登著 毎日新聞社

今年、検察・警察による冤罪事件が相次いで世間を騒がせました。

今年、日韓併合してから一〇〇年目に当たりますが、同じ一〇〇年前の一九一〇年(明治四三年)に、検察による冤罪事件として著名な「大逆事件(幸徳事件)」が起きました。

この事件は、私の故郷の松本市近郊の明科で起きた社会主義者宮下太吉による爆弾事件を口実に、多くの社会主義者・無政府主義者を逮捕・検挙し、うち、当時著名な社会主義者幸徳秋水など二六人を大逆罪として起訴し、二四人が死刑、二人が有期刑の判決が出された冤罪事件です。

なお、この事件を主導した大審院次席検事の平沼騏一郎は、一九三九年(昭和一四年)一月に第三五代内閣総理大臣に任命されましたが、日独軍事同盟の締結交渉を進めていた矢先の八月、唐突に、ドイツのヒットラーが、ソ連のスターリンと「独ソ不可侵条約」を結んだため、「欧州の情勢は

複雑怪奇」との迷言を残して総辞職をした人です。

「許されざる者」は、この大逆事件をテーマにした小説であり、波乱万丈の物語のため、上・下巻にわたる大著にもかかわらず、一気に読破できます。

②「ナニカアル」 桐野夏生著 新潮社

この小説は、「放浪記」の著者林美美子が、戦争に翻弄されながら、愛を貫くというのがテーマです。

その中で、美美子が昭和十二年の南京攻略戦には、毎日新聞の特派員として現地へ赴き、昭和十三年の武漢作戦では、紅一点の従軍作家として漢口陥落へ一番乗りを果たし、昭和十七・十八年には朝日新聞の報道班員として、仏印、シンガポール、ジャワ、ボルネオに滞在して現地の親日ムードをレポートしたとの史実が書かれています。

「ナニカアル」は、このように大新聞社が、読者獲得のため、軍部とつるんで、著名な作家を利用して、戦争を鼓舞したという事実を教えてくれます。

③「康子十九歳戦禍の日記」

門田隆将著 文芸春秋社

この日記を書いた栗屋康子は、太平洋戦

争末期に、家族と離れて一人東京で勤労動員に励む女学生です。

父親の栗屋仙吉は内務省の役人で、昭和八年に起きたゴーストアップ事件の時の大阪府警察部長であり、毅然として軍部と対決した人物でした。

戦争末期に広島市長に任命され、康子を東京に残して広島に赴任し、原爆に遭い、被爆死しました。

しかし、康子の母は被爆しましたが、一命を取り留めました。

このため、康子は何とか切符を手に入れて(入手経緯もエピソードです)、広島に行つて母の看病をしますが、その甲斐なく、母は亡くなりました。その際、間接的に放射能に被曝して、母を追うようにして十九歳の若さで亡くなるという悲しい結末です。



中山 喬央たかひら

①「通かなるカメルーン」

太田精一著 彩流社

筆者ご夫妻のカメルーンに対する愛情がひしひしと伝わってくる。

特に「日本を愛したカメルーン人」の項では、ドアラの有力な部族長の息子として一九四四年に生まれた人物の突然の自殺と、それに直面した筆者の令夫人が柩が土で覆われる時、堰をきったように墓穴の脇で泣き崩れた様子が描かれている。まさに日本を愛したカメルーン人の死に際したご夫妻の最高の哀悼の意志表明であり、文字通り現地に溶け込みながら家族ぐるみのチームワークで数々の難関を乗り越えられた様子が適切に表現されていて深い感銘を受けた。話は変わるが、日本のサッカーはカメルーン戦の前と後では様相が一変した。これも何か日本のサッカーに無かったものを撰取させてもらった御蔭ではないかと思われる。前ユネスコ事務局長松浦晃一郎氏の「心のふるさと、アフリカの彫刻」も日本経済新聞に掲載され「高い芸術性と力強さが魅力だ」と紹介されたが、この本の裏表

紙に掲載された「ダン」の面」が良く似ており、今更ながらアフリカ文化の奥行きの深さにも直面した思いであった。

②「情熱の経営」

三戸岡道夫編 栄光出版社

十一章に分かれており何れも珠玉の短編集であるが、第六章、慈恵医大病院（病気を看ずして病人を診よ）について感想を述べさせていただく。

薩摩藩下級武士で大工で生計を立てていた家に生まれた高木兼寛が、明治二年に藩立医学校に入学、そこで校長として着任したイギリス人医師のウイリスに認められる。

次いで旧師の石神良策が海軍軍医部の最高責任者となっていた縁を頼って軍医として海軍病院に勤務する。そして脚気について特別の関心を寄せるようになる。

海軍病院の中に新設された軍医学校にイギリスから教師として招かれたアンダーソンからも認められ、彼の母校であるロンドン、セント・トーマス病院医学校への留学が実現する。ここにはクリミア戦争の傷病者看護で有名なナイチンゲールが関係する看護学校や病棟があり、彼女の患者中心の医学思想に大きな影響を受ける事となる。

帰国後は患者中心の病院を設立し、それが明治二十年には、皇后陛下を総裁とする東京慈恵病院となった。

一方脚気の克服についても彼は大きな功績を残すのである。

現在に至るまで慈恵医大病院には、病気になっても慈恵に来れば大丈夫だという安心感と信頼感が患者から寄せられている。

③「平城京への道」

相原精次著 彩流社

あとがきに 日本古代史に潜むさまざまな問題に対する、私なりの「提言」の端緒、あるいは序説みたいな思いなのである。

この情熱がまさに全篇に満ち溢れている。県犬養三千代の記事は、十八頁に始まり、八六頁まで続いている。筆者の思いが痛いまでに分る。また全篇にちりばめられた自筆の絵画、これは著作権を避ける為の一方策であると思われるが、かえって読む人を惹きつけている。この本は藤原京・平城京訪問のさいの手引書としても印刷が鮮明で、レベルは高いが分りやすく解説されている好個のものとして、価値が高い。

中込 勝則

①「杜甫の旅」

田川純三著 新潮選書

私はここ二年ほど杜甫の生涯をその詩を追うことによつて、心の変化や作風の変遷などを勉強し、書きものにしてみようとして格闘していますが、八百頁を越えて書いても尚、道まだ半ばの感を深くしております。その過程で参考文献をいろいろ読みましたが、右の本は杜甫の生年から青春時代・壮年・老年までを分かりやすく書いて、今まで分からなかった点多数解説されていて大変参考になりました。内容については、いづれ書きものに纏めるつもりであります。

②「石川啄木歌集」

久保田正文編 岩波文庫

今年に入ってからある人に触発されて、短歌に興味を持ち、自分でも歌うようになりましたが、折々先人の歌集を読んでおります。

啄木も前述の杜甫と同じくその生涯の多くを飄泊に送ったことは知られていますが、二人の作品を読むと、飄泊の苦しさ・世に、

容れられず悶々とする心情・貧しさとの戦いなど、それを赤裸々におのれの作品に詠つて共通するものがあり、不思議と同一人物が詠ったのかと錯覚しそうな気がします。その苦しさ悲しみの中で詩魂が磨かれ昇華されて一流のものになっていった過程が良く分かります。

③「ここ過ぎて」(上・下)

瀬戸内晴美著 新潮社

これは詩人であり歌人でもあった北原白秋の生涯娶った三人の妻たちとのことを書いた小説ですが、最初の妻となった隣家の主婦松下俊子との不倫から彼女の離婚、白秋との結婚、そして離婚。この過程では白秋と俊子は、当時は存在した姦通罪で市谷監獄に共に投獄される苦しみも嘗める。

○君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

など、いい歌がたくさんつくられました。

二番目の妻江口章子との同棲、結婚。彼女はかなり変わった女であった上次第に精神を病むようになってこの結婚もついには破局。三番目の妻佐藤藤子と結婚し、彼女の常識的な愛に支えられて精神的にも安定し、ようやく詩人としての名声も得ていく。

白秋の作風は、若い頃の南蛮趣味から老年の枯淡の境地まで大きく変わっていきませんが、実生活の有様がこの変化に大きな影響を与えたことが分かります。

以上杜甫・啄木・白秋の三人に共通して言えるのは、その置かれた環境を赤裸々に詠い、その中で詩魂を磨き一流になっていくと同時に作風も変遷していったもので、作品と同時にその背景も理解しなければ、本当の鑑賞は出来ないように思います。



事務局だより

※新入会員の紹介

▲小田^{おだ}絃^{いと}一郎^{いちろう}氏

生 年 昭和十六年十二月

住 所 〒252-0307

相模原市南区文京一―二二―九

勤務先 ベラテック販売備 社外取締役

経 歴 東北大学農学部卒

農林水産省・農林中央金庫勤務を

経て現在に至る

興味あるテーマ

「源氏物語」「奥の細道」「世界

の食料・日本の食料」他

主な著書「新データブック・世界の米」

「世界の畜産」他

紹介者 中込勝則氏

(電話番号は敢えて記載してありません)

※会員の活動

▲三戸岡道夫氏

『致知』十二月号

対談「いま、二宮尊徳に何を学ぶか」

※12月8日(水) 忘年会

学士会館にて開催された。参加者二十人

十二月末現在の会員名及び役員

◎新井 宏 太田 精一

小田 絃一郎 鯨 游海

佐藤 健一 柴田 弘武

島津 隆子 高橋 由貴彦

瀧澤 中 ◎千坂 精一

○中込 勝則 中山 喬央

○鍋屋 次郎 平山 善之

藤谷 益雄 ◎三戸岡 道夫

村上 邦治 ○森下 征二

山本 鎮雄 隆 恵

◎顧問 ○幹事